

だんせい ちゅうしん  
男性が中心のミヤークツツ

ミヤークツツは季節のかわり自に行う「節祭り」です。重税を納めるために過酷な日々を送ってきた村中の人々が集い、無事に税を納められたことを喜び合い、休息を取り、踊り楽しんだのが始まりだといわれています。

ウヤ（55歳以上の男性）は、それぞれのムトラ（祭祀場）に3日間通う。



2日目・早朝は前の年  
に生まれた子を各ムトラ  
に登録する「マスムイ」  
行われる。

木 + 盛 = ごちそう → 異記

じょせい ちゅうしん  
女性が中心のユーケイ

ユーケイは女性中心の祭祀で、宮古各地で大切にされてきました。

ユーは「豊かな世」、ケイは「乞う」を意味し、台風や干ばつなどの厳しい自然条件の中、集落の無病息災や五穀豊穣を祈ります。

池間島でもユーケイは重要な祭祀のひとつとされ、旧暦の9月に行われます。池間島で育った、または池間島に居住している51~55歳の女性は「ユーケインマ」と称されます。ユーケインマたちは神歌をうたい、クイチャーを踊るなどして9つの拝所を巡拝し、神々に豊作や航海安全などの祈願をします。



## いろいろな用途に使われた土地・スクニヤー

『池間小学校発祥之地』の碑が建つスクニヤーと呼ばれるこの小さな一帯は、集落の歴史を垣間見ることができると土地です。

小学校跡地の東側にはトウヌガナス御嶽があり、学問・出世の神が祀られています。その脇には円状に石を積み上げた古墓があり、漂着した遺体を埋葬したといわれています。

小学校が建てられる前は、前里村番所があり、1895(明治28)年には、西辺尋常小学校の仮教場として幕をあけました。1903(明治36)年に校舎が改築され、学校名も池間尋常小学校と改



称しました。ちなみに、この年に人頭税がようやく廃止されています。

この頃、各地の学校に設置された奉安室には、教育勅語と天皇・皇后の写真が収められました。池間は敷地内に奉安殿という独立した建造物として

1928(昭和3)年に設置されており、前を通る際には最敬礼することとされていました。損傷が激しいですが、現存

し、県内最古です。1938(昭和13)年に小学校は現在のユニミイの地へ移転しましたが、その後も、青年会場や幼稚園など、長く利用され続けました。

## 移住者を送り出しつづけた池間島

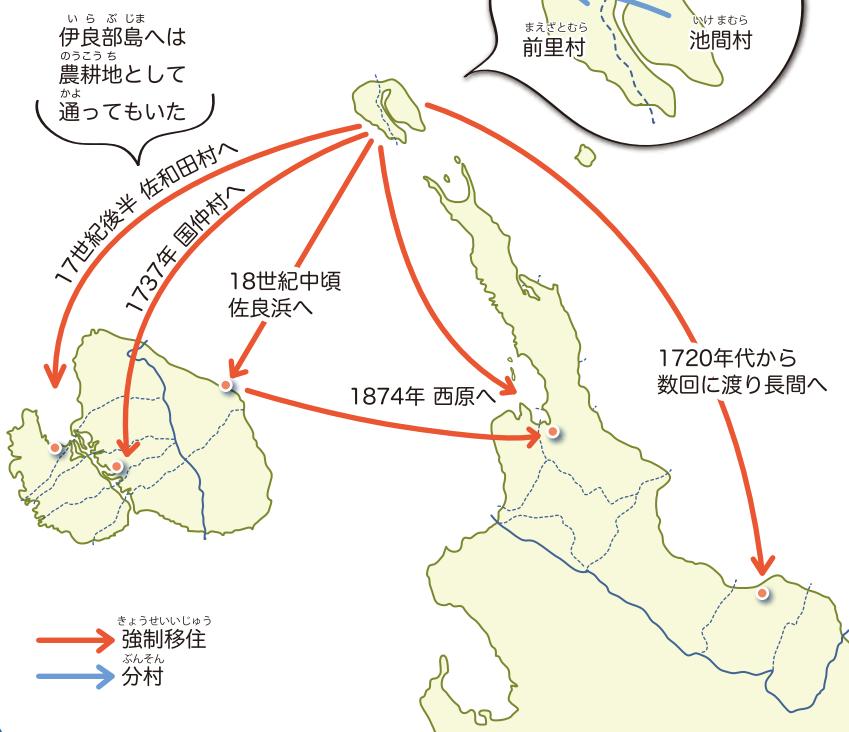
池間島は、小さい島ながら数百年にわたって移住者を送り出しつづけ、池間民族の歴史を築きあげてきた島ともいえます。

1600年代頃、宮古諸島内でマラリアが大流行し、多くの人が亡くなりました。琉球王府は廃村の危機に陥った村々を再建させるた

め、池間島から伊良部島の佐和田村、国仲村、城辺の長間村へ強制的に移住させました。

1766(明和3)年には、人口増加に伴い、池間村から前里村が分村し、さらにその約100年後の1874(明治7)年に、西原村が村立てされました。

### おおしま けして大きくない島だけど…



## や び じ 八重干瀬



や び じ  
八重干瀬は、池間島北方5km先に広がる、大小100余りの  
日本有数のサンゴ礁群です。春から夏にかけての大潮の時期  
に、海面上に多くのサンゴが姿を現すことから「幻の大陸」と  
も呼ばれています。2013(平成25)年に国の文化財として指定  
され、翌年にフデ岩が追加指定されて  
います。それぞれのリーフは細かく名  
前がつけられており、池間をはじめと  
する漁師の大事な漁場でもあります。

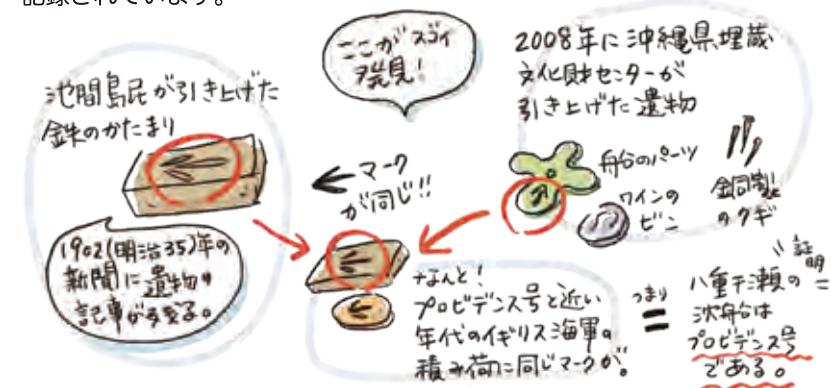


## や び じ しづ ごう 八重干瀬に沈んだプロビデンス号

1797年、イギリス軍艦プロビデンス号が、北太平洋海域の探検調査目的としてイギリスからアメリカ、ハワイ、北海道の室蘭を経由し、宮古島沖の八重干瀬で座礁、沈没しました。座礁した詳細は、艦長のブロートンが著した『北太平洋探検航海記(1804)』に記録されています。

座礁地点の海底からは、散乱したワインの瓶や船のパーツ、イギリス海軍の刻印が入った鉄塊などが発見されています。

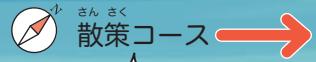
プロビデンス号のほかにも、進貢船や外国船などが八重干瀬で座礁したという多くの記録が残されています。



地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回  
『海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～』  
(2020年10月18日)より

本物の設計図から、細部にいたるまで  
精密に製作されたプロビデンス号の模型

# 狩俣コース



所要時間:徒歩約30分  
(約1km)



## 宮古島

古書には「ひやんな山奇」と  
記されている。東辺守名山奇より  
景色が穏やか

西平安名崎

## 池間島

池間大橋

リュウキュウウチシャノキ

2013年に  
1本だけ発見  
分布の北限が  
宮古島に書き換えられた!

230

昔、大津波の波が  
ここまで来たと  
言われている  
ズブニ目印

ツナミズブ(津波到達地点)

かりまたしゅうらく  
狩俣集落センター

START

神役のみが使用する門。  
一般の人々は立入禁止

北門(トユーピトウイ)  
(祭祀用の門)

ナビゲーション  
(長途)

## モスク

魚  
狩俣は宮古を代表する  
養殖モスクの産地。

1977年「狩俣モスク生産  
グループ」設立

10月頃 種つけ  
3月頃 収穫  
5月頃 シーズン終了  
大きなホースで  
ズズベリと  
吸いとる  
網に生れる

昔は大きな魚壇が  
ずっと並んでいた

カキス(魚壇) P53

先島諸島火番盛  
かりまたおみ  
狩俣遠見 P50

クスヌカ(後の井) P26

ピヤイス  
方位石

北

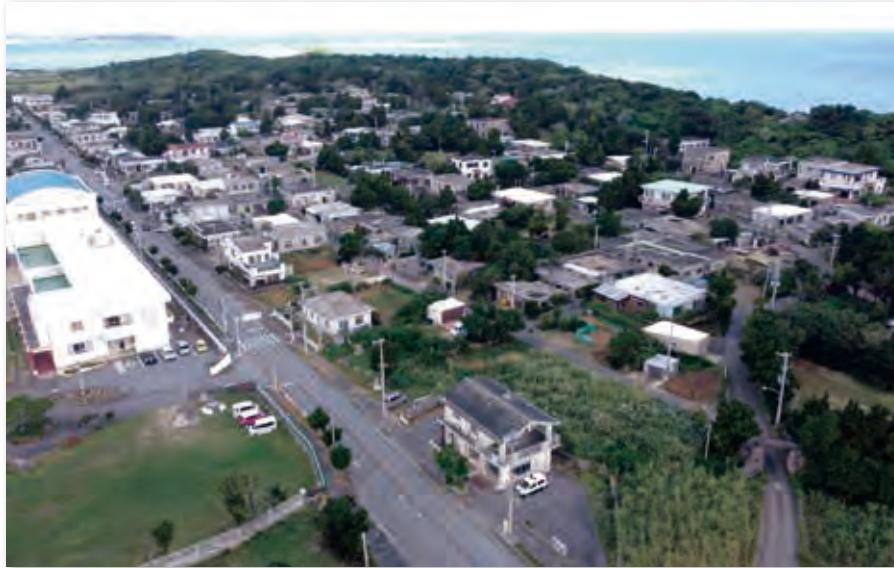
明治の頃までは  
3坪ほどの  
遠見番屋が  
残っていた。

方角が刻まれている

集落を囲む石垣と大門(推定)

※集落内の拝所や郡社に許可なく立ち入ることは禁じられています

# 狩俣



かり また さん ぼう うみ かこ のうぎょう き ぱん えん がん ぎょぎょう さか  
狩俣は三方を海に囲まれ、農業を基盤とし、沿岸漁業も盛んで  
す。『宮古八重山両島絵図帳(1647)』には、「かりまた村」と「根井  
ま しる とう こう 間村」が記され、のちに統合されて「狩俣村」になりました。

めい じ ころ しゅうらく いし がき もん かこ  
明治の頃までは、集落は石垣と3つの門で囲われていました。  
これは他の地域では見られません。石垣の撤去は長い間避けら  
れてきましたが、1900年代に人口増加にともない、集落の発展  
といふ名目の元、西の大門と石垣が取り払われました。北西にあ  
る祭祀用の石門は往時のままで、東の大門はいまの生活に合わ  
せて改修されています。集落内には4つのムトウがあり、夏ブー  
スや竜宮願いなどの祭祀が行われています。

## かり また むら だ でんしょう 狩俣の村立ての伝承

むかし とぅゆん あか ぶず ま ぬす  
昔、豊見赤星テダナフラ真主と  
いう女神が、当原という地に天か  
ら降り立ちました。ところが当原  
みづ たい へん こま の地は水がなく大変困ったので、  
しま じり かい がん きた い どう 島尻の海岸を北へ移動し、イスウ  
ガ (磯井)を見つけ、大城山(郡  
むい す はじ 杜)に住み始めました。

よ な し わか  
ある夜、真主は名も知らぬ若い  
おとこ あいだ こ さざ ゆめ かい 男との間に子を授かる夢を見て懐  
にん げん き だん じょ ふた 妊し、7か月後に元気な男女の双  
ご しゅっせん 子を出産しました。しかし、父親  
だれ だれ おや が誰なのかわかりません。

そ は あ もの  
そこで真主は「初めて会う者を  
父親にしよう」と決め、ふたりを  
だ き 抱いて出かけました。真主が大城  
山の裏の瀬(パナブツ)まで来る  
と、大蛇を這う大蛇と出会いまし  
た。大蛇は3人を見るなり、首を  
あげ、尾を振り、踊りはじめまし  
た。真主は「きっと夢の中の男  
は、この大蛇の化身に違いない」  
と確信し、大蛇を子どもたちの父  
親にしました。

う たき ゆ らい き  
『御獄由来記』(1705)

しゅうらく  
狩俣集落は、この女神豊見赤星  
テダナウラ真主から始まったと伝  
えられます。

むす こ  
真主の息子「バブノホチテラヌ  
ホチ豊見(ティダノブス)」は、集落  
うじ がみ すうけい の氏神として崇敬されています。

むすめ やまと あお  
娘の「山ノフシライ青スバノ真主」  
は、15歳くらいの頃、青スバ(つ  
くさ)で作った冠をかぶり、白衣  
を着てコウズ(蕪かづら)を腰に巻  
き、髪を振り乱して「私は世のた  
め神になる」と言って大城山に  
籠ったのち、行方知らずとなっ  
てしまいました。

しんじよ  
その後、集落では神女たちがフ  
シライと同じ姿で大城山に籠り、  
そしんさい 祖神祭(ウヤーン)を行うよう  
になったといわれています。

さんごう じちひやくねん  
参考『自治百年』(2003)



## イスウガ- (磯井)

## クスヌカ- (後の井)



イスウガ-



クスヌカ-

イスウガ-は狩俣集落発祥に関わる井泉で、古謡には「豊見赤星テダナフラ真主」によって発見されたとうたわれています。祭祀の際に、お茶湯の水として必ず加えられ、村立ての根幹に関する貴重な井泉です。

クスヌカ-は、時の酋長「大城殿」が掘った井戸で、掘削にあたり、鉄製道具を使ったと古謡にうたわれていることから、鉄器の伝来にも関わる重要な井泉と考えられています。

ふたつの井戸とも市の有形民俗文化財に指定されています。

## 狩俣の植物群落



狩俣  
コース

狩俣の植物群落は、集落後方の南北に伸びる丘陵に広がっています。

宮古諸島内では最大規模の面積を有する自然林です。

この丘陵は地形や地質など変化に富んでおり、その環境に合わせた様々な種類の植物が群生しています。

群落は古くから郡杜(大城山)と呼ばれ、磯津御嶽や大城御嶽など、集落にとって重要な拝所が存在するため、立ち入りが禁じられ、植物群落全域が神聖な場所として大切に保護されています。

## クバラパーズの復讐

宮古各地に有力な按司が立ち並んでいた頃、クバラパーズとその妹が、琉球の津堅島から白川浜に漂着し、しばらくそこで暮らしていました。そのうち妹が石原城の思千代按司の妻になったので、クバラパーズは住み良い地を求め、狩俣に移り住みました。

クバラパーズは生まれつき妖術・占術に長け、その上とても器用で、狩俣集落を囲う石垣や門などを見事に造りあげました。

ある日、妹が夫の思千代按司と長男を糸数按司に暗殺されたと泣きながらに訴えてきました。怒ったクバラパーズは「いつか絶対に仇を討つ」と心に誓いました。

そんな折、糸数按司から「城が狭くなつたので大きな城を造つて欲しい」と依頼されました。しかしこれはクバラパーズの仇討ちのことを知った糸数按司の罠でした。

ところがクバラパーズは罠であることを簡単に見抜きました。「いよいよこの時がきた。城は造らず、棺

桶を造ることになるだろう」と、平良へ出立しました。

道中、平良の手前にあるソノリ嶺の坂道で、クバラパーズが木の葉に呪いを唱え、ふっと息を吹きかけると、木の葉は蛇になり、勢いよく城へと飛んでいきました。クバラパーズは、糸数城が見える所まで悠然と向かいました。

その頃、糸数按司は城の廁で用を足しながら、長い鉄製のかんざしで耳かきをしていました。その按司の手に、蛇が強く噛みつけました。何度も追いかけても蛇はしつこく噛み続けるので、怒った按司は、手に止まった蛇をもう一方の手で思いっきり叩きました。ところが勢い余ってかんざしで耳の奥の急所を刺してしまい、死んでしまったのです。

こうして、見事クバラパーズは仇討ちに成功し、予言どおり、持参した大工道具で糸数按司の棺桶を造り、狩俣へ帰つて行きました。



## 13~14世紀 宮古の豪族とグスク

12世紀前後から16世紀頃まで続いた時代を、沖縄では「グスク時代」と呼んでいます。この頃、各地の有力者は城を築き、それぞれの周辺地域を支配するようになりました。



この時代は、島外から新しい文化が持ち込まれ、人々の交流が盛んになりました。また鉄器の普及により、農耕が発達した時代で、人口も急激に増加していました。

14世紀頃は群雄割拠の時代で、佐多人と目黒盛が台頭し、二大勢力があらそげに争った結果、目黒盛に統一されます。その後、15世紀後半頃から、仲宗根豊見親の時代へと移り変わっていきます。

狩俣コース

# かり また お こ りょう 狩俣のツナカキヤー(追い込み漁)

宮古の追い込み漁は、1909(明治42)年に池間島の長嶺新津氏が、  
沖縄の糸満から4隻のサバニを購入し、宮古各地の漁師を集めて始め  
たのがきっかけだと伝えられています。当時は数隻で船の集団を作  
り、多良間島や石垣島まで出漁していました。狩俣でも全盛期には  
50名以上が従事していましたが、現在は約10名程の友利組のみが  
操業しています。

まいとしちゅうがくせい　たいけんがくじゅう  
毎年中学生の体験学習として追い込み漁を  
おこな　こうけいしゃ　いくせい　か　と　く　はげ  
行い、後継者の育成を兼ねた取り組みにも励  
んでいます。

